

上山市の武家屋敷は「森本、三輪、山田、旧曾我部家4軒が連なって現在まで小改造はあるものの当時のままを残している」ことが特徴で、生活感が感じられることにある。

武家屋敷が4軒そろって残っているといっても、「他地域の武家屋敷に見劣りする古い家ではないか」という声も聞く。しかも、4軒中2軒(わが家と山田家)が住んでいるだけである。そして、私の息子は神奈川で生まれ育ち神奈川で生活しているので将来この家に住むことはないだろう。生活感ある武家屋敷として保存するには、住む人がいて手入れが行われていることが必須要件であることは理解している。

しかし、私は以前から、せっかくの古い歴史のある武家屋敷に住む人もなくなり、だんだん建物のあちこちがほころび廃屋になっていくのを何とか食い止められないか、という気持ちを抱いていた。残していくにはどうしたら良いか？それには観光資源としてお役に立ち訪れる人や地域の人に認められる以外に方法はないと考えた。幸いなことに、上山市は昔から城下町として、また温泉町として知られ、上山城をはじめとする町並みには武家屋敷は歴史的な重みと文化的な風合いを与える貴重な資源の一つであるはずで、やり方によってはお役に立てるのではないかとも思っていた。

そこに平成16年来始まった武家屋敷通りの道路整備の話が持ちあがり、道路のみならず観光資源として役に立つ町並み整備が出来るチャンスに恵まれた。またこの整備に専門家の立場で全国的な見地から指導を続けている都市デザインの第一人者の佐藤滋早

稲田大学教授からアドバイスを受けることもできた。「あるがままを見せるのが観光。上山の武家屋敷は博物館ではないのだから...」との佐藤教授の言葉に勇気づけられ「いまのままの古い家」で良いのだと目覚めた。ただし、これまで受け継いできたものの価値に気づき、それに相応しい修景をし、磨きをかけることが不可欠で、それによって個性と五感に訴える魅力が増すと気づかされた。

そこで整備の中で、昔から生活用水や防火用水として利用してきた水路が今までU字溝に変わっていたが、せせらぎの水音を再現するため敢えて開渠に

パリエューサイト VALUE SIGHT

歴史遺産の上山藩武家屋敷 文化景観の価値を見直し 地域資源として現代に蘇る

文化遺産である歴史的建造物の保存には日本中が難渋している。ところが上山城西側に残る武家屋敷は住民パワーで保存整備が行われ、文化活動が芽生えたり温泉旅館の観光客の散策コースになっている。国土交通省の平成17年度の「手づくり郷土賞」の地域整備部門で受賞した。



武家屋敷を見学する「ゆかたと下駄姿の観光客」

したり、埋まっていた石垣を見せたり、さらに土色のカラー舗装と石張りを効果的に組み合わせたり、電話線を電力線電柱に移設し共用することで電柱の本数を半減させ石垣の視野の連続性を確保したり、明るく落ち着いた見違えるような町並みに磨きをかけることができた。

また整備委員会での検討はもちろんのこと、保存会メンバーや地域住民との話し合いをきっかけに住民の意識も高まり、武家屋敷がある仲丁地区住民自身による清掃活動や花いっぱい運動も始まった。マスコミにも取り上げら

れ、町づくりにかかわる人たちとの連携を受けたり、その他の団体からも賛同を得た結果、道路整備の他にライオンズクラブの40周年記念事業として水琴窟の設置や、三輪家の門の整備や、コンクリート壁への建仁寺垣の設置など、武家屋敷を引き立てる修景支援を受けることができた。また「女性の集い30周年記念事業」による武家屋敷裏手に東屋を建て休み所を設置し、訪れる人への心温まるおもてなしとしてお茶のサービスと気さくな会話も開始した。さらに月一回であるが上山温泉女将の会主催で武家屋敷の庭を眺めながらお茶とお菓子のサービスなど、さ

と協力で出来上がったものだ。今は本庄小学校の卒業生の卒業制作として欄間のような透かし絵を作りはめ込み、彼らにとって歴史ある体育館の木材を使って城下町に違った形の歴史と思いを再現することになっている。また初雪を見た12月2日には有志による萱葺き屋根補修用の萱刈を行い、来年の武家屋敷の萱屋根の補修の材料を確保した。この活動も萱屋根保存のために少しでも積極的に役に立てる事はないかという気持ちにあふれる有志の思いの表れである。これらさまざまな活動は多くの心ある地域の人々と行政の人々の温かいご支援があったからこそ出来たことであり、取り組みの輪はさらにどんどん広がっている。

これらが継続して行われたことで、現在は地域の個性と魅力がさらに高まり、自分の地域の自慢が出来るほどになったと思っている。また、温泉旅館の宿泊客が浴衣と下駄で散策しており、また来たくなる憩いのふるさとの街になりつつある。観光客を町に引っ張り出したことで、観光資源として少しはお役に立てているのではないかと思っている。雪の降った日は少ないが、秋の観光シーズン中は平日で一日50人、土、日曜日は100人を超す人々がこの地を訪れ、朝と夕方の賑わいは大変なものであった。

今回の道路整備は棚ぼたかもしれない。だが、これがきっかけであるレベルを超した修景が実現した。このあるレベルを超したことで、認知され、人出が増えるポジティブスパイラルに入った。数年後にも飽きられないようにするためには何かソフトウェア面で連続して仕掛けをする必要がある。継続的に保存活動ひいては街づくり活動をするためには「いろいろな団体で行っている活動を有機的にプロデュースするしっかりしたリーダー」が不可欠である。これらの活動を行う中から熱きリーダーが育って欲しいと思う。特に上山市は個々の活動は結構盛んであるのにまとまりが無いとされているので…。将来、武家屋敷と同様に地域が朽ち果てないために。

村山



上山藩武家屋敷保存会
会長

森本登志郎

さまざまな活動が行われるようになった。

これらの結果として、「武家屋敷通り整備事業」が全国規模の表彰である国土交通省の平成17年度「手づくり郷土賞」を受賞することになり、一層勇気付けられることとなった。一方、今後も継続的に城下町に相応しい景観作りを行うことを目的に一般公募で志が同じな方を集め「城下町再生志士隊」を結成した。志士隊の活動として、月岡ホテル側に黑板塀を設置して武家屋敷通りの入り口としての景観に合う町並みにしようと、自分たちで古くなって取り壊し予定になっていた本庄小学校木造体育館の木材をはずし、その材木で黑板塀を作った。この作業はこの城下町再生志士隊のみならず、木材組合、大工業組合、建具組合、塗装組合など数多くの人々の理解

森本 登志郎（もりもと・としろう）

上山藩武家屋敷保存会会長。森本家16代当主。
1944年生まれ。

2004年民間企業を定年退職後、上山市の地域活動、町づくりに参加。

〒999-3155 上山市鶴脛町1丁目7-48

TEL・FAX 023-672-0296